

〔翻刻〕柳の糸（下・二）

堀文庫研究会  
（代表・田中則雄）

島根大学附属図書館堀文庫所蔵の後期読本の中から、小枝繁作『世二問堂 柳の糸』（文化六年刊）を翻刻する。前号までに掲載した巻一〜四に続き、本号には最終の巻五を収録する。

世二問堂 柳の糸  
柳の糸卷之五

東都 齋離陳人 戲編

第九回

當吉期せずして吉祥を得る  
卯木命を知て恩愛を惜む

且説平太郎當吉は、村長に誘引れ越中次郎兵衛盛嗣が旅館に到りし処に、一人の老党出来て客堂に請じ入れ、多々に歓待にぞ、甚不審。「こは何の故をもて斯は做らん」と想ふ処に、一室の紙門を開ゐて立出る人あり。平太郎、「こは盛嗣よ」と畏みつ平伏すれば、彼人急にこれをたすけ起し、「某は則盛嗣なり。足下の父兵衛尉殿とは親しく交りはべりき。其子におはせば、対面は初てなれど、些も心なおき給ひそ」と、奥底もなく聞こゆるに、平太郎は身の罪科を（二オ）問るべしと想ひしに、さはあらずして親しき言葉を聞き、案に相違しつ、容を改め、「御名をば予て承り及びつれど、見参は今日初めてなるに、父が好身をおぼし給ひ、斯念頭なる命をうけ給はるこそ歎はし。そも何等の事ありて、某を召し給ふや」とあるに、盛嗣、「爾不審給ふは宜なり。目今足下を招き

まいらすは、これ私ならぬ公のこと也。某いやしくも院宣を蒙り此地に下り、蓮花坊が髑髏と、且三十三間堂の棟となるべき木を撈すに、棟となるべき木は、此岩田川の岸辺に一株の柳あり。その喬きこと雲に接ゆれば、これその用に堪ゆべく思ひ、多くの樵夫等を集て、是を伐すに、かぎりなき大木なれば、伐得ること能はず、纒に切りくちをあげおくに、不思議なることには、一夜にして其疵愈ること幾回といふことなし。よりにて斧を用ゆるに術を失ひ、二ウ奈何せんと想ふ処に、熊野山に住と聞及へる裸行上人、某が旅館にもう来給ひ、『木を伐髑髏を素ん事を要せば、此岩田川の辺に、横曾根平太郎といふもの忍び居れり。彼は横曾根兵衛尉光當が男兒にて、柳と髑髏には深き因縁あるもの也。この平太郎をして事を掌らさば、速に成就すべし』と告給へり。此上人のことは神変不思議の活仏なる事は、世もつて知所なれば、などその言語の空しかるべき。よりにてその教にまかせ、足下を煩さんとす。此事某が私をもて頼みまいらすにあらず。院の御願を果し奉らん為なり。いかに諾ひ給ふべきにや」とあるに、平太郎驚ていふ、「こ

はおもひかけず。斯申すは勅命を乖き奉るに似たれど、さら／＼さる事に候はず。某父の志を続んと、予てその事に心を苦しめ、此五年が程さま／＼に撈せど、二オ挿絵 三ウ挿絵 三オ 木をも髑髏をも索得ざるものに、事を掌らし給ふとも、恐らくは功を奏するに甲斐なからん。此事熟々慮り給へ」と回答すれば、盛嗣頭をうち点かし、「聞え給ふ処道理ながら、さらに他を索るにあらず。木は則 柳にして、髑髏はその根に挟まれあるよし、たしかに上人告給へり。且柳を伐ることは足下斧をもて伐初むるにあらざれば、数千人を用ゆとも做し得がたしと、これまた教へ給へり。斯あるからは疑ふべきにあらず。速に領掌ありて事を掌り給へ。その功成るにおひては、叡聞にたつし、廢たる家を興さしまいらすべし」と諭すを、平太郎是をうち聞くに、父が遺言に符合合しつれば、心裡ふかく感、回応つるは、「おせ承りぬ。裸行上人の示し給ふからは、よも驗なきことは候まじ。このうへは子細侍らじ。三三三 命にまかせ彼柳を伐、その根を探し髑髏を素まゐらせん。事成就せば父が勅勘をみゆるしありて、廢家を興さし給はらんみ



卷五 二ウ・三オ

はからひを、ひとへにねぎ奉る」といひ聞こゆれば、盛嗣辞を正し、「速の領掌某におゐて満足する所なり。然るうへは、足下が宿望をばわが功にかへても遂しめまいらすべきに、心強くおぼせよ」といと頼母しく肯しかば、平太郎深く感佩しつ、「然らばまつ家に帰て其準備を做はべらん」と、暇を告て退出つゝ、急ぎ我家に還れば、

妻の卯木は、夫の身のうへ記掛、奈何なり給ひけめと、易き心もなく待わびしに、平太郎恙なく帰り来るさへあるに、飲べる色の看へしかば、あまりの嬉しさに心はやり、夫が家裡に入るを待かね、「今日の吉左右奈何にぞや。とく聞かし給へ」といそがし問へば、(四オ) 當吉さぞと思ひやり、「まづ喜び給へ。予て想ふとは違ひ、吉事にてぞありつれ。そは這般々々の事なり」と、盛嗣が云聞えし有枝有葉を細やかに物語れば、怪しむべし、卯木これを聞より俄に患ひの色を顔し、さし俯き居るに、平太郎は、わが身の発達べきを喜びもせぬ妻が光景を看、深く不審いへりけるは、「いま某が素懐を遂る機会を聞て、斯秋の色を看さし給ふは、いと心を得ね」と問れて、

卯木は面をあげ、眼にもつ涙を拭ひつゝ、「爾怪しみ給ふも宜也。夫の幸あるを聞、なぞて愁ふる妻やあるべき。奴家は愁ふるにはあらず。あまりの喜ばしきに、そごろに感涙の出はべりしなり。さらに心にかけて給ひな。斯る歡ひの時なれば、まづ三盃を酌て祝ひ給へ」と、厨に行つて、土器に銚子とりそへ持來り、これを夫が前に居へ、「いざ聞し(四ウ)めせ」と勸むるに、夫も心解て、「よくもし給ふものかな。まづ一盃を飲て明日の準備をせめ」と、夫婦酌かはしつるにぞ、想はず幾杯を傾けぬ。

當吉は、此年来父の志を嗣んと百折千磨を凌ぎ、思ひしことの今日不料素懷を遂べき階を得たれば、心飲ばしきがまに／＼數盃をほしつれば、十分の酒氣を帯び、われにもあらずそのまゝ其所に熟睡せり。此時緑丸は前より母が膝に抱れ乳を飲て居たりしが、これもおなじく睡りけり。卯木はわが児を膝より下し、これを平太郎が側に寐さし、夫とわが児が顔をうち看つ、しきりに涙をはふりおとさし、少剋喚て居たりしが、やゝあつて云出けるは、「奈何わが夫。わが身のほどを明白に聞え申さんはおもはゆければ、酒をすゝめて寐さしまゐらせ、夢

にて知らし申なり。そも奴家は岩田(五才)川の岸辺に生し柳の精なり。前世おん身と奴家とは、此熊野山の麓に住し獵師夫婦にて、おん身が名は岩久曾といひ、奴家が名を青柳といひぬ。夫婦が間に一人の女兒出来しより、わが児の愛に溺れ、無量の罪を作りし報にて、過つてわが児を殺し、はじめてわが身の因果を感悟し、蓮花坊といふ僧の弟子となり、只願仏道執行なしつるに、師の坊千体の仏像を作らんと、その木を索るに、然るべき木のあらざりしを、おん身大願を發し、『われ死してその塚に生し木の幾年を経ずして大木とならんずるに、それをもて仏体を作り給へ』と誓して失給ひつるに、奴家もこれにならんと、ともに失けるを、蓮花坊不便の事におぼし、二人が塚に柳を植しに、誓し言葉空しからで、二株の柳忽ち生立ぬ。(五ウ)然るに前世の因果をひき、幹を接て連理となり、人字の形をなし、夫婦の相を現しつるを、蓮花坊淺猿とおぼし、まづ御身が宿願を果さすべしと、その柳を伐て千体の大悲の像を作り給へり。さる仏縁を結べる功德により、はやく人界に生をかへ、今のおん身とはなり給へり。奴家は素の柳にて、夫婦が間を

さかれしを怨み、蓮花坊が失給ひし髑髏を根をもて引ま  
とひぬ。されど蓮花坊はかぎりなき大功徳あるにより、  
今日本の帝後白河院と生れさせ給へり。こゝにさりか  
たきものは、夫婦三世の因縁なり。前に獵夫のとき夫婦  
となりしがはじめにて、非情の柳に生をかへても、尚妹背  
の語らひをなしつるに、今おん身のみ人界に生れ給ひ、  
奴家は素の柳なれば、三世の因を果すことあたはぬを、  
閻王のみはからひとして、庄司が六女、女兒卯木命数尽  
て失たりし屍へ奴家が精を入れ、おん身と夫婦となさし、  
三世の因縁を果さし給へり。しかのみか、緑丸といふ子ま  
で授け給ふ。こは過世の子にて、今世に又子と生れ来り  
しなり。また鹿の親子は、時澄、夜叉丸と生れ来て、前  
世の恨を報んと、さてこそ是までおん身と奴家とに仇を  
なせり。是も又幾程なく亡ぶべし。そはおきて、われ／＼  
夫婦が縁既に尽、今ははや別れんとするこそ悲しけれ。  
されど前世の宿願空しからで、三十三間堂の棟となり、  
仏果を得る事の歎し。是ひとへに蓮花坊の慈悲心、いま  
後白河院と生れさせ給ひても、尚失すして、かく仏縁を得  
さし給ふなり。さはあれ夫子に別るゝ哀しみは、仏果を

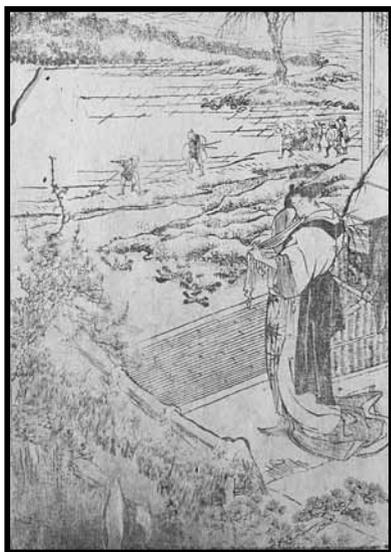
得べき喜びも忘れ果て、さりとむなくははべれども、定業  
なれば詮すべなし。わが夫明日は六ウ彼処に至り、柳を伐  
んとし給はゞ、まづ観音の宝号をとなへ、爾して斧を用  
ひ給へ。是柳は観世音に因縁あるさへに、おんみが  
前生の柳は大悲の像に刻まれ給へば、彼是の故をもて、  
人夫を害す功を速にし給ふべし。必ず怠り給ひそ」と  
云も涙にあやなけれ。やゝありて又いふ、「かばかり覺悟  
はしながらも、心ひかるゝは緑丸にてはべるなり。君昔  
の身にましまさば、御乳人傳婢よと、多くの傳きあるべ  
きを、果報拙く零落し時に生れて父母の外に便りのな  
きうへに、母にさへ別るれば、君より外に便なき薄命の  
程を憐みて、不便を加へ給へかし。怪しきものゝ子なり  
とて、悪みばしし給ひな。奴家が産し子ながらも、正し  
く君の胤なれば、成人なさば世の人にたち増ることもあ  
るべきに、養ひ給ふぞ大事なり。俄に乳に放るれば、七  
オたゞ食物に気を付て、食すごさしなし給ひぞ。また  
時々は灸もすへ、兎角に病のなきやうに心を用ひ給へか  
し。さはいへ男の手しほにて斯さゝやかかのめんどうをな  
さし申ぞ悲しけれ。わきて申おくべきは、此子は今年三歳

になりはれば、世が世の時にあるならば、光當公の孫君が髪置の寿とて、綾や錦を着るべきを、今はそれにはひきかへて、針目縮さへ着せかぬる、貧しきなにもせめてはと、賃機を織度ことに、織端の糸を繫つゝ、辛じて漸く此子が着丈の縮を織、彼処の櫃に収めおけば、これを母が遺留物とおぼし、いかにともして小袖にし、城皇神や奴家が墓に詣さして給へかし。草葉の蔭よりこれをみば、千部万部の経多羅尼の回向を受けるよりも喜しう候ぞ」といひつゝ、寐入りしわが子を抱あげ、顔つくく（モウ）づくとうちまもり、不覺の涙に沈みしが、やゝあつて泣目をはらひ、「曙野の雉子夜の鶴も、子を想ふは生あるものゝならひにて、恩愛の別れほど世に悲しきはなきうちにも、わきておん身が身のうへは、世の子どもとは事かはり、怪しき母をもつなれば、世の人々に謾れ、いかなるめにか遭らんと、心ひかれて迷ふなる、心裡を想ひやり、母がいまはの言の葉を、くわんぜんなくともよく聞ね。はや三才になりぬれば、乳はなくとも育べし。母は因果で去りゆけば、わが亡あとを慕ひ泣、かならず煩らひ給ひなよ。今よりはおとなしう、夜も泣ずに独寐よ。何事

をして遊ぶとも、わるあがきして怪我なせそ。もし父うへが後妻をむかへ給はへ隔なく、奴家と想ひ大事にし、口さがなくて悪まれな。成人の後々は、父この弓矢を受嗣（ハオ）て、いさぎよき名を輝し、人の鑑となりてたべ。かまへて比興未練をし、甲斐なきものよ、道理こそ柳の産し子なりぞと、母がことまで世の人の口端にかけて誹謗な。おもへば不便のわが子や」と、抱きしめつゝよゝと泣、涙淵なすばかりなり。

此時は是春の日のながきながらも、かゝる嘆に時移りて、入相の鐘かうくと音のふときこそあれ、不思議や、泣居し卯木俄にがほと起上り、夫と子とをうち見やりつ、「嗚呼なつかしのわが夫や。恋しのわが子や。いつまでも去らじと想へど、今ははや閻王の使、頻なれば、名残りおしくも帰るなり」と、「阿」と一声叫びしが、そのまゝ其所に転び臥す。音におどろき平太郎、緑丸も諸ともに睡を醒、平太郎、妻がはかなき光景を看るにおどろき、屍を抱き起しつ呼びかせど、（ハウ）その甲斐さらになかりしかば、「さては夢とも現とも、聞しは実でありつるかや」といふうちよりも、緑丸声ふりたてゝ、「母う

へのおふ」と、屍にまつはれつひてさげべども、回答せざれば泣出し、「やよ父上よ。母うへは熟寐しておはすなる。おこしてたびね」とぐわんぜなく云聞ゆれば、當吉は涙にくれつわが子を抱き、「あな不便の緑丸。物の道理を弁たねば、母が失しと知らずかや。今はいかに慕ふとも、母は今世になき身となれば、何として回答を必ずせよ。賢きものぞ。これよりは母がことを想ひきり、父を母とも見よがし」と、すかせどさらに聞入れず、「父うへいかに宣ふとも、乳をもちておはさねば、いかで母うへとは看まゐらすべき。母うへよのおふ、起てよ」と、また屍にとりすがれば、平太郎はこのありさまを看るに忍(九才)挿絵(九ウ)挿絵(十才)ず声をあげ、「いかにわが妻の靈魂よく聞ね。子はこれ程に慕ふなるに、縦われをば思はずとも、この児は不便にあらざるや。夢中に縁故をきくうへからは、ながくとはいはじ、今一回物いひかはし、緑丸に飽ほどに乳を飲さしたび候へ。いかに非常の木といへど、情あればこそ夫婦となり、一子をもうけし。靈あれば、われ親子が嘆きを汲み、今の願事叶へてよ」と、口説たてゝ嘆きけるは、只是白痴なるものごとく、実



も憐の光景也。

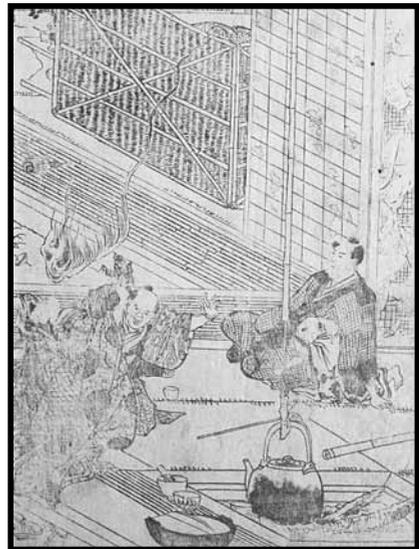
かゝる嘆の折から、外の方に人音して案内を乞ふものあり。平太郎これを聞、誰人やらんとうち驚き、急ぎ涙をおし拭ひ立ち出て見るに、年の頃六十にちかき翁の、一張の輿を釣し門辺にイみ居るにぞ、こは思ひかけずと熟々と是を見るに、何ぞ想はん、吉野の邑の喜三太なれば、いと不審ついへりけるは、「おん身はこれ喜三太とのおはさずや。そも何等の事ありて十ウこの地方へはもう来給へる。まづ這裡へ」と、一室なる処に請じ入るれば、喜三太歎びその坐につき、さていふやう、「某こゝに来ることは深き縁故あり。そは置、足下の恙なくおはずを見て、いかばかりか歎ばし。さりながら愁給ふ色の看ゆるは、奈何なることのおはすや。いと心ゆかず」といへば、平太郎、「爾宣すは道理なり。こは世に類なき事にて、しかくのこと侍りぬ」と、わが妻卯木は柳の精にて、一子緑丸を残し、目今去り行し体たらくを詳かに物がたり、緑丸を抱き出て引あはするに、喜三太は大に驚き、奇異の想ひをしつ、しばし回答もせずありしが、やゝあつていひ出けるは、「そはさこそ物憂くおはすらん。

さる御嘆の処へ聞えまいらせんは心なきものとおぼすらめど、云はで止んは胸苦しき所為なれば、一通をば物語しはべらんに、願くば聞てたびぬ」と、「女兒桜女おん身を十二才、恋あこがれて、既に死べくほどに病つるにより、あまりの便なさに、足下にこのこと願聞えて、せめて妾ともすべく想ひ、この事を女兒に云聞するに、心嬉しくてや、病少しく怠りつれば、又も病のおもらぬさきにと、只今誘引来て彼処に待しおけり。斯おしつけたる所為は足下のおぼされん程も畏けれど、子を想ふ親の心の思さは、人の誹謗も世の義理も、恩愛に迷ひ弁へべらぬをば、みゆるしありて、此事を承引給はるべきや」とありつれば、平太郎言語を正し、「不肖の某を左計想ひ給へること忝くはあれど、わが妻目今没命てその屍いまだ尚家裡にあり。さるをなど后妻の事を議るべき。この事夢々あるべからず」と固く辞みて諾はざれば、喜三太もこの道理に再び云いつべき言語なく、とさまかうさま想ひめぐらすに、「女が此事を聞かばその望の叶は十二ウさるをはかなみ、またいかななるやらん」と、深く心を煩はしつるが、忽ち想ひ出すことありて云へりける

は、「宣す処道理にはべれば、強ちにこの事をば頼みま  
いらさじ。さはあれおん身今日までも内君のおはして嬰兒  
の介保し給ふを、俄に失給ひては、何くれのことにつき  
てさぞ不自由に在らん。よりて某一人の奴婢をとどめ  
おき、薪水の勞を助けまいらせん。是前日わが為に仇  
を亡し給はりたる恩に報ゆなれば世の聞も憚はさふら  
うまじ。この事奈何に諾ひ給ふましや」とあるに、平太  
郎・緑丸が介保をばいかにせんと心を悩す時なれば、些  
も辞す喜びつ、「某敢報ひを受んとにはあらねど、  
今発達べき機会あるに、幼なきものゝ嘆きに心ひかさ  
れ事を誤もせば、一生埋木となりて朽果るのみか、父が冤罪  
を明らむ事なきは、何ぼう無念の所為なれば、足下の御  
はからひに任せ、十二オこの一件の事を頼みまいらすに  
こそ」と聞ふるに、喜三太喜び、急ぎ門辺に出、擗荷は  
し来たる驕子の裡より女兒桜女をいざなひ出し、従へ来  
し奴婢等とともに家裡に入らしむにぞ、平太郎これを見  
るに桜女なりしかば、顔色喜びず、喜三太にうち対ひ、  
「こは足下の令愛桜女のぬしには在さずや」と不審問え  
ば、喜三太涙さしぐませて云、「いかにも宣はすこと

く某が女兒なり。こはおんみを欺にはあらねど、なべて生  
あるものゝならひにて、子を思ふことは鳥獸すらいとせ  
つなり。まひて人をや。我兒といふは纒にこの女兒一人  
を残せり。しかるにおん身を慕ひはるゞとこれまで来  
つるを、承引給はじとて俱ひ帰らば、再び病発るか、自害  
して命を縮むるかの二つを出じ。それを知りつゝ誘引還  
らんは、いかに悲しき事にはべらずや。とても想ひ死ぬ  
べくは、おん身の家にて死なすこそ、十二ウ少しはその  
志気を遂さすやすがとも想へば、斯ははからひ候ひぬ。  
足下の貞烈きには尋常の人の及ぶべきにあらぬに、かゝ  
る事を聞へ申すは、恥かしく心なきに似たれど、またお  
ん身の為に議るに、少しき助なきにしもあらず。故いか  
にとなれば、男の手しほにて嬰兒を恙なく生育ひ給はん  
こと、おそらくは堪かたからん歟。不如わが女兒をし  
て養ひ給へ。彼力を尽して介保せんずるに、その志をし  
憐とおぼさば、妾ともして給はれかし。尚それも心に応  
じ給はず、巾櫛をとらし給はずとも、露恨とは想ひはべ  
らし」と頼み聞ふるに、平太郎、実もおもへど、行末  
いかにあるらんと躊躇て回答せでありけるに、怪しひか

な、卯木が屍を収し一室のうちより、一団の鬼火陰々  
 と燃出、桜女に靡きかゝるよと看えつるに、「阿」と一声叫  
 びてそのまゝ其所に倒れ臥したり。人々ははと驚く中に  
 も、(十三才) 喜三太は慌忙く女児を抱き起しつ叫び生す  
 に、やゝありて夢の醒たるが如く心づき、人々を見て云  
 へりけるは、「只今の鬼火この身の上にかゝるよとおぼえ  
 しに、いと艶女子の愁ひたるけはいにて告聞えしは、  
 『奴家は是柳の精なり。かりに卯木が体をかりて平太郎  
 どのと夫婦になり、一子をもうけたれど、既に命尽て、  
 今故の柳にかへり、卅三間堂の棟材となり仏果を得んと  
 す。されど恩愛の羈さがたく、緑丸がこと心にかゝ  
 り、速に仏果を得がたし。願くはおん身今より平太郎ど  
 のと夫婦となり、わが児を養ひ給はれがし。是も又因縁  
 の爾らしむ処なり。さればわらはが乳汁をもておん身に与  
 へまいらすなり』といふかと思へば蘇生ぬ」と物語に、  
 平太郎、喜三太をはじめ、其処にある処のものみな奇異  
 の想ひをなし、桜女が乳を絞しみるに、乳汁(十三才)  
 滾々と迸り出るにぞ、緑丸を絞して呑しむるに、些も辞  
 むけはいもせで、ひきしく襲し母のごとくまつはれつひ



て吞けるは、まことに不思議の光景なり。こゝにおゐて平太郎、喜三太親子に對ひ、「前に宣へる道理といひ、今また桜女の乳汁出るを見るに、是只事にあらず、仏菩薩のなし給ふみはからひと思へば、前の妻が忌も果わが素懐をも遂たる後は、桜女のぬしをもて後妻とすべきに、願はくは今より、緑丸を養育して給はれがし」とありけるにぞ、喜三太親子かぎりなく喜び、「命いかで乖はべらん。よく／＼緑丸を養ひ申さんずるに、夢ばかりも心な煩はし給ひそ」と誥ひつゝ、喜三太は桜女と奴婢等とをとゞめおき、その身は吉野に還らんとせるを、平太郎おしとゞめ、「某明日よりして彼柳を伐、蓮花坊が觸體を捜さんとす。此こと十日を過ぎずして功を(十四才)挿絵(十四才)挿絵(十五才)なすべし。それまでは此処におはして家を守り給はれ」と聞ふるに、喜三太、「いとより易きことなり」とて、此所にぞ止り居れり。

## 第十回

謀を誤りて凶賊線絨に遭ふ  
功を奏して窮士聖恩を蒙く

斯てその翌日に及びつれば、平太郎朝まだきに家を出、盛嗣の旅館に赴き案内を乞ふて対面し、一般の応答終ての後、昨ふ卯木が為体よりして、桜女俄に乳汁の出たる奇怪の一件をおちなく詳に語り聞えしかば、盛嗣奇異の想ひをしつ、「実裸形上人の空しからぬ告の程は、今の物語にて想ひあたれり。かゝるうへは今日よりして柳を伐の奉行をし給へ」と聞え置、予て樵夫等を集へ置つれば、その人夫を平太郎に従はし、おのれもうち連れて彼処に往ん(十五才)とする折から、取次の下僕慌忙く出来て報けるは、「只今行脚の僧のよしにて、一人の旅僧来り訴、奉ることの候よしを聞へ候。いかにはから申すべきや」とあるに、盛嗣いと不審、「そは何事にや。いで子細を聞ん」とたち出てその事を問に、彼僧云出けるは、「某ことは行脚の僧にて候なるが、昨ふ岩田川の辺を過つるに、獵夫とおぼしきものに出会しに、彼仏事あれば回向を頼のよし聞え侍るに、素より僧の做すべきわざなれば、

辞まずして其家に至り、經を誦念仏など申居るうち、彼が同類とおぼしきものその家に来り、何やらんいきまきたる声するを、「おぼろげに聞侍るに、全く前脛強盜の類とおぼえしほどに、貧道も欺れて此輩が毒手におちいり非命の死を遂ぐることにや、我出家人の身なれば、命を没さんこと露ほども惜むべきにあらねど、いまだ熊野(十六才)に詣ざれば、今回參詣せはやと、はる／＼こゝまで来り、纒にして宿願をとけさるも無念の所なれば、密に後道よりぬけ出、彼御山に詣て素塚を果し、還る道にて一基の新墓の候ひつれば、立ちまりて回向して過んとするに、其側に四五人の樵夫休ひ居たりしが、貧道に聞えけるは、『此新墓は都より下りし琵琶法師なるが、岩田川の辺に住む強盜の為に害せられぬ。彼賊は獵夫のかたちに打扮しかく／＼なる面貌也。もし彼に遭ふときは、虎の穴は免れ出るとも遁れがたし。おん身もよく心得給へ』とあるに、思ひまはせば昨ふ仏事を頼める人なれば、不図も危き龍潭を免れし心地して、喜ぶに似たれども、如此悪賊をそのまゝに置いて多くの衆生を害んことの方見さに、樵夫等に対し、『斯はかりの

強盜をいかでたゞに捨置や』と問ひしに、『彼は不思議の勇ありて、当国の中に(十六ウ)は敵するものなし。これを官に訴へ官兵を乞請とも、おそらくは捉へらるゝこと能ふまじ。若その難を遁れば、後又奈何なる仇をするらんと、是を恐れて誰ありて訴ふものなし』といへり。貧道は釈氏の徒にして、慈悲善根を事とする身の、かゝる難義を聞ながらそがまゝにおかんは甲斐なし。縦彼賊に悪まされて害せらるゝとも、此国の民にかはつて死んば此の意に称へば、この事を聞とそそのまゝ此御旅館に参り、この事を訴奉る所なり。殿には是等の事には関り給はざれど、彼を捕へん人は殿の外ありともおぼえ侍らねば、かくははからひ候。あはれ彼盜賊を召捕給ひ、此国の民を救はせ給はゞ、いかばかりかの善根となり、卅三間の御堂速に落成しはべらん』とぞ聞え上げれば、盛嗣そのいふ所を熟々とうち聞しが、何想ひけん忽ち大喝一声し、『誰かある、そやつを綁よ』とあるに、(十七才)「畏りぬ」と下僕どもおりかさなりて、高手小手にぞ綁めぬ。僧は大に叫び、『貧道何の罪ありて斯は綁め給ふ』とうち恨めば、盛嗣乾笑、「汝が訴ふものは此人にあらずや」と、

平太郎を呼出して引あはずに、「いかにもその人に候」と回答すれば、盛嗣賊僧を叱り、「盗人たけ／＼しとは汝をや云なるべし。そも此平太郎どのといふは、忝くも院の聖旨にまかせ、今柳を伐るべき奉行たり。その人をもて盗賊なりといふは、正しく夜又丸が手下の賊とこそおぼゆれ。速に実事を白状し、棟梁の在家を告ぐべし。もししからずは骨を挫てなりとも云はさすべし」と殿に問ひければ、賊僧俄に身を戦し、「あな恐ろし。相公の明察には蔽隠ことあたはじ。いかにも某は夜又丸が手下のもの也。平太郎のぬしは万夫不当の勇者にて、夜又丸此人の為に辛きめを見ること幾回にかおよび（十七ウ）つれば、その仇を報んと謀をもうけ、某を彼家にやり、別に一人の賊をやりて強て盗人なりと云はし、又某をして近き辺に触知らさし、終に訴出て公の力をかりて害んとしたりしなり。且棟梁夜又丸はその住居さだかならずといへども、多くは熊野山のうちしかくの所に躲居侍りぬ。斯明白に申すからは前に宣すことく、某が一命を助けさしたべかし」とおそる／＼云ひ聞えしかば、盛嗣點頭ていふ、「汝逸に白状に速ぶうへは、なぞて前の言語

を差ゆへき。必ず命は助け得さすべし。さはあれ素盜賊の罪あれば、ひとつの功を立ずしては世の聞えもあれば、助けんこと憚あり。よりに今わが云にまかすべし。そは奈何するぞとならば、汝謀を做得たるおもちして、夜又丸が住所へ密に平太郎を誘引、彼を欺き引出して擒にさすべし。爾せば汝手引して賊を捉へさす功あれば、（十八ウ）今の罪を免し命を助くるに道あり。この事心得たりや」とあるに、賊僧斜ならず喜び、「命畏り候ひぬ。このごとき容易き事をもて重き罪を免し給ふ。相公の御恩は胆に配て生涯忘れ侍らじ」と云にぞ、盛嗣平太郎に對ひ、「足下彼を案内者とし、夜又丸が許に赴き、彼を擒捕、光當どのゝ冤罪を明らめ給へ」と、俄に屈竟の収兵十余人を授け、「とく／＼」と急したつるに、平太郎は、盛嗣が好意の程感佩しつ、賊僧を前にたゞせ、収兵を將て、夜又丸がもとにぞ急ぎけり。

こゝに阿古根の夜又丸は、前夜不意平太郎に出会て戦しに、その武勇敵しがたく、散々にうち負て逃去りしが、この人世にあらんかぎりわが心腹の病なりと、ひとつの謀を設け出し、手下に僧のありけるを行脚の僧

に打扮せ、別に又賊をやり、平太郎を盗人なりと云触さし、その後かの(十九)僧をもて盛嗣に訴さしたれば、さだめて今ころは平太郎捕へられけめと思ひ、おのが謀の発覚たるをば露ばかりもしらで、只願その左右を待所に、忽ち彼僧帰りに来ていへらく、「棟梁の妙計鬼神も謀るべし。さしもの盛嗣を欺き得て、平太郎を捕擒しはへれば、近日のうちに必ず頭を刎らるべうおぼえぬ。これにつき某が愚意に想ひさふらふは、平太郎が妻の卯木は勝たる美女なり。彼をそのまゝに置んば、千金の璧を泥中に沈めおくにひとし。早く奪ひとりて烟花に售給はゞ、必幾許の金を得給はん。是後の仇をなからしむ両全の謀なり」と欺くに、さしも知量ある夜叉丸も、天命の尽る所にや、賊僧が偽りの謀を突ぞと思ひ、「そはよくも心つきたり。とくはからひ給へ」とあるにぞ、賊僧回応けるは、「命畏り候へども、某彼処に行て卯木を奪ふに、もし知る者(十九)あらば、これまで辛苦して謀果たること忽ち發覺て、平太郎罪を免さるべし。しかるときは彼怨みを報はんとするは必定なり。是草を打て蛇を驚かすにあらすや。此事奈何におぼすや」とある

に、夜叉丸完尔として、「爾なり〜。われこのことをはたと忘れたり。こは自ら往て奪ふべし」と、俄に手下の賊等に触て、五六人を引率し岩田川へ赴かんとす。

賊僧は平太郎と申し合せしことなれば、夜叉丸に對ひ、「某も途まで見送りまいらせん」とうち連て行程に、既に熊野山を出はづれんとする折から、予て号やなしたりけめ、腰に佩たる鉦を頻に撃鳴らせば、賊等は、こは何事をするぞと不審処に、平太郎當吉十余人の收兵を率ひ、行前の途を遮り高やかなる声をしつ、「いかに夜叉丸汝が為に我父冤罪を蒙り失給ひてより、此(十九)年月幾許の苦艱を受つれば、早亡して父の修羅をやすめ、且は庄司が仇をも報んと思ふ処に、前日不図出会しときは、月黒くて討洩しつれど、天網いかで免るゝことを得べき、今日只今出会ふこと、これ我私の仇を報んとのみにあらざ、院の御宿願の妨をなせし罪あれば、某に命せて召捕へきの旨、越中の盛嗣の指揮によりて走向ふたり。いざ快く縛を受よや」と呼はるにぞ、夜叉丸愕然と驚きしかど、素より猛々しくさときものなれば、忽ち賊僧を顧、「今日の事は常言のごとく、飼犬に手を咬るゝと

やら、汝に欺かれてこゝに及べり。今はなか／＼悔ゆる  
 とも甲ひなし」と、脇挟み持たる肩突刀を閃かすかとす  
 れば、賊僧が首忽ち落ちて鞭なんのごとく地上に転々  
 たり。この間に平太郎、左右を下知しつ討てかゝれば、  
 夜叉丸も手下の賊を二十才挿絵三十才挿絵廿一才  
 励し逆ひ合せて戦ひつれど、寡は衆に敵すること能はざるさへ  
 に、平太郎當吉仇を報ひんと勇を逞しうして戦ふなれば、  
 奈何でよく敵することを得べき、手下の山賊等或は討れ、  
 或は逃失て、今は只その身ひとりになりしかば、とても敵  
 しかたきを知り、急に身を転して逃走らんとするを、當  
 吉大喝一声し、猿臂をのぼし、夜叉丸が肩先を引と  
 らへ、力にまかせて引ほどに、終に仰さまに撲地と仆れ  
 けるを、収兵の們おりかさなり、高手小手にぞ綁めけり。平  
 太郎は勇たち、「根を断葉を枯すべし」と、人をやつて夜  
 叉丸が幽棲の光景を探らすに、目今逃失たる小賊等の告  
 しらしけるにや、一人も止り居らぬよしを帰報しかば、  
 「早くその巢穴を毀つべし」と下知しおきつ、自ら夜叉  
 丸を牽て盛嗣が旅館に還り来、彼所の体たらくを委し  
 く聞え(廿一ウ)ければ、盛嗣その功の逸なるを賞美し、



夜叉丸をば一室なる処に繋ぎ置、多くの人を附置て蔽に  
守衛し、さて翌日より平太郎を伴ひ彼柳を伐らしけり。

當吉柳の下に至りてこれを見るに、「こは妻となり一子  
をもうけしものを」とおもへば、わが手づから斧を下し  
て伐るに忍びず、猛き心もたゆみ、不覚の涙にくれ居た  
るを、盛嗣を諫め、「普天の下王土にあらざるはなし。院  
の御宿願の為にこの木を伐て伽藍に用ひ給ふこと、豈空  
しく伐折て薪となるにひとしからんや。ことには足下の父  
が冤罪をも明らめ、廢たる家を興す機会なるに、爾雌々  
しくて事を誤らば、塵に塵をそふの悔あらん。とくお  
とこたましひを出し伐給へ」と勵ませば、當吉はこれに恥  
らひ、妻のいひ置けるにまかせ、わが身はさらなり、其所  
に居るほどの樵夫等をすゝめ、(廿二才) 観音菩薩の宝号  
を高やかに唱さし、自ら斧を下しそめ、「いさとく伐よ」  
と下知すれば、「うけ給はりぬ」と、樵夫ども各手に斧を  
ふりもたげて伐るに、怪しむべし、前日とは異にして、些  
ばかり伐たる疵もいゆることなく、昨ふまでも伐あぐみ  
たる大木を、纒に三日のうちに伐倒しつるぞ不思議なり。  
このとき平太郎その伐株に対し香花を備へ、「わが妻の精

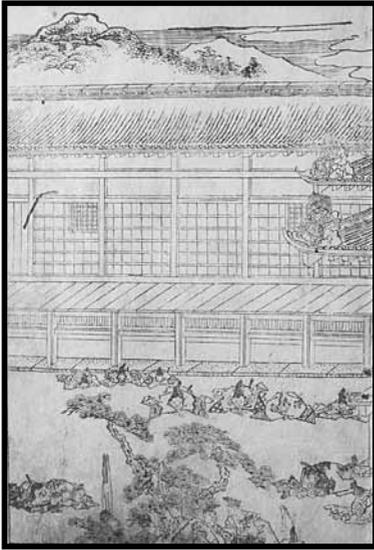
靈頓生菩提草木成仏」と回向し果て后、再び心裡に念  
しけるは、「あはれわが妻、靈あらば、この川の水底に沈  
みあるといふ蓮花坊が髑髏は、柳の根に挟まれあるよし  
を聞き、願くはこれを浮み出だ、我に功を全たからせ  
よ」と丹誠をこらし折けるに、不思議や紫雲鬘として天  
にたなびき、しきりに雨花音楽聞ふるとひとしく、岩田川  
の浪滄々として漲り上り、光明赫々として大きやかなる  
蓮花忽然として(廿三才) 柳の伐株のもとより生ひ出たり。  
人々これはと驚き見るに、一箇の髑髏花のうちに端然と  
してありけり。かゝる折から何方よりともなく、裸行上  
人漂々と現れ出つるに、人々再び驚き、これを尊み拜  
すれば、上人手を揚て蓮を招けば、奇なるかな、花のう  
へなる髑髏翩翩として上人の掌に飛移れば、則これをと  
つて平太郎に授づけ、「善哉此時や。汝が前世の功德とい  
ひ、且今世におゐても孝心あさからぬ善根により、目今  
蓮花坊が髑髏を授け功を全ふさせ、父の汚名を雪  
ぎ、廢し家を興さしむ。これ渾仏菩薩の御はからひなり。  
尚信心怠らず、仏神を崇敬せば、必ず景福あるべし」  
といひ終て、また盛嗣を顧み、「足下都に帰らば、今日

のことを詳に奏問し、御堂造當念るべからず」と云も果ぬに、足の下より白雲生じ、習々として天に（廿三才）昇れば、再び雨花音楽聞え異香芬々として薫じわたり、正面に阿弥陀如来現じ給ふと拜まれしに、彼裸行上人忽ち勢至菩薩と変し給ふ。その背後には廿五菩薩現じ給へば、人々「阿」と感ずる折から、不思議や、柳の伐株より一道の白氣立昇しが、その裡より卯木が容貌現はるゝと看ゆれば、忽ち變じて觀世音と化現し給ひ、光明辺をかゝりやかしければ、集ひ居るほどのもの、眼前かゝる奇瑞を拝み奉るに、身の毛いよだち随喜の涙とどめかね、渾一般に南無阿弥陀仏と唱ける。そがなかにも平太郎當吉は感涙袂をしぼり、過こしかたの事おもひ出て、何とわくかたなくありけるに、諸の仏菩薩漸漸と雲井遙に去り給へば、柳の下に生し蓮も、霜の朝日に逢ふごとく、消て痕なくなりけり。斯てその日も暮しかば、人々はみなおのが（廿三才）さま／＼に帰り去りぬ。

さて翌日になりしかば、盛嗣も當吉も美々しく旅粧しつ、鬮體をば當吉首にかけ、夜叉丸をば張輿に乗さし蔽に驚固し、柳をば熊野浦より都へ運送と、数百の人手

をもて海辺まで引出さすに、奈何なる故にや、地より生たるがごとく些も動かざるにぞ、盛嗣をはじめ當吉も、「こは不思議なり。如何にせん」と想ひ悩める処へ、喜三太、桜女は、緑丸を抱き此処に来り、此光景を見て、平太郎に聞えけるは、「此柳のことは非情とはいへ、正しく緑丸をもうけたる母なるに、おゝかたならぬ靈あるなれば、恩愛に心を残し、かゝることもありけぬ。且この子物の心をわかずといへど、母に名残を惜ませ野辺送りさす心をもて、熊野浦まで牽さし往んはいかに候ぞや」と聞ゆれば、當吉実もとは想へど、盛嗣が手まへをかね、とかふの回応せでありし（廿四才）挿絵（廿四才）挿絵（廿五才）を、盛嗣これを聞、喜三太、桜女等に名対面し、「そはよくもこゝろつきたり。とくはからひね。當吉どのも異儀は宣ふまじ」とあるに、當吉盛嗣に謝し、「とく牽し候へ」とあれば、喜三太親子歎び、緑丸をたすけてひかさするに、さしも引悩むたる木の軽々とひかれゆくこそ不思議なり。これ正に恩愛の羈には如何なるものもひかるゝといふは、今こゝに想ひ知られぬ。

斯て盛嗣、當吉は、鬮體と夜叉丸を將て都に登り、縁



卷五 廿四ウ・廿五オ

故を詳もとつまびらに奏問そうもんせしかば、法皇ほうわう叡感えいかん斜かたならず、まづ夜叉丸やしやまるをば検非違使けんひゐしに下し尋問じんもんありしに、悪事あくじ詳はやくでうに白状およに及びければ、光當みつまさが冤罪わしつたちまち忽はに晴はれ、やがて勅勘ちよくかんのみゆるしありて、夜叉丸やしやまるをば當吉まさよしに下したまひ、その仇あだを報むかし給ふ。然処しかるに彼柳事かのやなぎこと故なく都みやこに來りし程ほどに、則すなはちその木きをもて棟むねとし、卅三間堂げんだう造営ぞうえいありしに、幾程いくばくなくて成就せうじゆせしかば、廿五ウ 岩田川いはたがはの柳やなぎの伐株きりかぶをもて大慈だいじの像ざうを造らしめ、その体の裡うちへ蓮花坊れんげぼうが鬮體ぐまをおさめ、これをもて本尊ほんぞんとし、又前年またさきのとし蓮花坊れんげぼうが作り置しと云千体の御仏いせんたいのみぶつを熊野くまのよりとり上し、これを堂どうの左右さゆうに安置あんちし、開眼供かいがんく養目出度やうめだつど執行ぎやうぎんありしかば、院いんの御頭みづかの御惱おんなみ全愈ぜんいさせ給ひければ、御飲ごのりびかぎりなく、盛嗣もりつぐをば越中えちゅうの前司ぜんじになし給ひ、平太郎へいたろうには父が旧領吉野ふるのりよを下し給ひ、兵衛尉ひやうゑいになされけり。かゝれば盛嗣もりつぐ、當吉まさよしの二人は、朝恩あそんの辱かたしげなきを拝謝はいしゃし斜ななめならず飲よめびけり。當吉まさよし、今いま廢家すたれしやへを興おこし父が旧領ふるのりを復すことひとへに盛嗣もりつぐが好意こういによれりと、深かく恩おんを感佩かんぱいせり。その後熊野のちくまのより緑丸りよくまるをはじめ、喜三太きさた、桜女さくらめを呼びむかへ、桜女さくらめをもて後妻のちつまとし、また喜三太きさたは吉野よしのの産うまれなれば、這回下し給ひたる采邑さいいの奉行ぶぎやうとなし、

うからやからむつまし  
妻子血属睦うして、昔むかしに廿六才増まさりときめきてさかへけ  
るとなん。

柳の糸卷之五大尾（廿六ウ）

作者 小枝 繁 印（独醒之印）

画工 蹄齋北馬 印（北馬）

筆耕 鈴木武筈

彫工 三之卷 朝倉卯八 四之卷 彫工 宮田吉兵衛

○己巳新鐫目次

愛護しんぞん伝 小枝 製作 後編三冊

小桜姫風月奇観 山東京山作 前編三冊（廿七才）

午 依藤太いしやう 遺響 歌川国貞画 全五冊

春 思夫景しゆまう 清まつ 同 作 全五冊

新 小桜姫風月奇観 山東京山作 後編三冊

板 糸桜本朝文酔 歌川国貞画 全六冊

東 都 本銀町二十日 前川弥兵衛

文化六己巳孟春発兌 日本橋四丁目 西宮弥兵衛

書 肆 麹町三十三日 田辺屋太兵衛

同平用町二十日 伊勢屋忠右工門（廿七ウ）

（本学教授）